



3月上旬、9カ月ぶりに道端の所々に雪が残る岩手県山田町を訪ねた。東日本大震災から1年が経とうとしている。昨年6月、医療救護活動時にお世話になった地域医療推進室長のWさんと保健師のSさんが突然の私の訪問を温かく迎えてくれた。高台にある町役場から見える風景には、無料公衆浴場といくつかの店舗が新設されているだけで昨年6月と比較して大きな変化は認められなかった。

岩手県の医療ネットワークの中心である21県立病院のうち、山田病院を含む3県立病院が被災した。昨年7月4日に県立山田病院が仮設され、整形外科医の院長先生ら3人が外

被災地に残された『がれきの山』

—東日本大震災発生1年を迎えた山田町を訪ねて—

情報広報部

橋本 洋一

来診療に追われていた。今年度、CTの導入が決定されたが、「箱物が出来ても、その中で働く医師の確保が出来ないと機能できません」との院長先生の言葉は、現在の岩手県の医療の厳しい現状を端的に語っていた。現在、行方不明者が757人で転出者を加えると約1600人の人口減となり、残る175500人の住民の医療をこの県立山田病院と3つの診療所が担っている。現在、この町で完結した救急医療体制は機能しておらず、県立宮古病院への搬送に依存している現状をWさんは強調された。

シンガポール国民から贈られた車で、Wさんは17mもの津波に襲われた船越湾と8・5

mの津波がみられた山田湾に連れて行つてくれた。この両津波が重合して、数多くの犠牲者を出し、NHKテレビで大きく報道された老健施設も今は取り壊されて何も残っていない。Wさんの母校である船越小学校も被災し、学校の看板だけがその存在を示している。「同級生で元漁師の用務員が『校庭にいたら危険じゃないか』と今後の対応に戸惑っていた先生方に疑問を呈し、裏の高台に避難し職員生徒全員が助かったんです。避難して約5分後に津波がやってきたらしいです。彼の言葉がなかったら、船越小学校も宮城県の大川小学校のように多くの犠牲者を出していたでしょう。両親と兄を失い、

年老いた祖父母と暮らしている男の子の住居跡をWさんが指さした。一旦、避難した両親が高校生の長男と出合い、家に引き返して津波に襲われたらしい。今年、中学に進学する(被災時、小学5年生)男の子のことを思った。涙がじわっと目頭にたまって周囲の景色がぼやけて見えなくなった。両親を失った子供達が東北3県で2000名を超え、片親を失った遺児を含めると2000名を超えるらしい。私達はこれらの子供達に出来る限りの援助の手を差し伸べなければならぬ。

「先生、あれを見て下さい」。船越小学校の海寄りに2つの雪に覆われた不気味な隆起物が目に入った。「がれきの山です」。これらのがれきの処理に東京都がいち早く対処し、今、静岡県島田市の桜井市長が山田町を訪れ、がれきの処理に積極的に協力しようとしている。この市長をリコールしようとする騒いで

いる自分のことしか考えない利己的で心ない住民達が一方で存在する。多くの尊い命を失い悲しみに覆われた大地の復興に協力しようとする市長の足を引つ張る愚鈍の民に心から怒りを覚える。放射能の影響がないのに、思考停止状態に陥り、風評被害を無責任に広げる住民の姿をみると、外国から賞賛された誇り高き日本人の姿がかき消されるようで無念でならない。石原知事も、桜井市長も住民工ゴに惑わされることなく、がれき処理を英断された点でその理念とリーダーシップは大いに賞賛されるべきである。19世紀の米国で社会改革者として活躍したジェームス・フリーマン・クラークの《政治屋は次の選挙しか考えないが、政治家は次の時代を考える》という言葉通り、2人の政治家はこの点において本来の政治家と言えるだろう。選挙民の顔色を伺う優柔不断な政治屋が多い中で、緊迫した状況が展開される現代という時代はリーダーシップを十二分に発揮出来る政治家を求めている。

日本の歴史を記した古事記が編纂されて1300年の歳月が流れた。日本人はどこから来たのか？人類学者埴原和郎先生の『日本人の2重構造説』はすでに定説になっているが、最近読んだ邪馬台国の日向灘説は大変興味深い(『日本古代史を科学する』中田力、PHP研究所、77-121-122)。そして、その起源が秦の始皇帝時代の斉にあると言う。国家が成熟発展するのに、500年前後の時間を要するらしい。我々日本人は、時間の連続性に思いを馳せ、利己的で小市民的なるものを乗り越え、傷ついた同胞を思いやる日本人本来のアイデンティティーを再確認し、復興に向けて協力し合い前進しなければならぬ。